

# 千刈狸の呟き

看取りとはもともとは「病人のそばにいて世話をする」、「死期まで見守る」、「看病する」という、患者を介護する行為そのものを表す言葉でしたが、最近では人生の最期における看取りを持って、単に「看取り」と言い表すことが多くなっているようです。

以前、なぜ「看取り」と書くのか、その意味を疑問に思ったことがあります。看を取り上げるということ、もう看(ケア)をしなくてもいいよという看の終了の意味であろうと思っていました。ちなみに、生まれたときは赤子を取り上げるといいますが、これは、どういう意味かをネットで調べると、母親が文字通り「産み落とす」のを「取り上げる」のが、そのころまでのお産であったそうです。民俗学者は、この「取り上げる」という言葉を、娩出時の物理的なすがたとは考えず、赤ちゃんを神々の世界から人間の世界に「トリアゲル」「ヒキアゲル」という意味が込められていたと解釈でき、昔の日本人が、産まれたばかりの赤ちゃんをすぐに人間社会の一員とは認めず、神々からの預かりものとして、養育できないときは容赦なく間引いたそうです。そうであるならば、看取りという意味にもこのような民族学的な意味があり、民俗学的に看取りとはそのヒトの看を終わらせ人間の世界から取り上げて神々の世界に送るという意味にもなるとも考えられます。

よく聞かれるのが、死を迎えるとき、病院がいいですか？ 住み慣れた場所がいいですか？ この質問には多くの方が「住み慣れた場所がいい」と答えると思います。しかし、なかなか最近では自宅で見守るのを迎えるのは難しい状況です。

1950年頃の日本は自宅での看取り率が80%以上でありましたが、近年では自宅での看取り率は10%台です。それに反して、いまだ病院での看取り率は80%を超えています。世界を見渡しても、こんなに病院での看取り率が高い国はありません。個人的には病院は治すところであり、看取りの場所ではないと考えています。

さて、多くの方が最期に関わってきた中で、看取る主体は誰なのかを考えた時、それは関係性のある家族であると考えます。私たち医療や介護従事者も関係性のあるものに括られることになるのですが、その人の人生を考えたときに家族や親戚や友人と比べれば、その付き合いの時間や濃さが全く違うのではないかと思います。もちろん家族

## ～ 看取りについて ～

黄昏狸

の中でも関係性の薄い人はいるのですが、たかだか最期の数ヶ月、数年の間に関係者として関わった私たちが「看取り」の主体ではないような気がします。

サマーセット・モームが言うように「100%人は死ぬ」というのは紛れもない事実です。そんな当たり前の現実の前に、私たちは愚直にならなくてはいけないと思うのです。その時、良い最期(死)を演出するような「看取り」は何か間違っている気がします。それは遠藤周作が言う善魔(善のなかにも悪が潜み、悪の中にも良いことが存在しているということ)にも繋がると思います。つまり、善魔とは正義のつもり、良かれと思つての弊害のことです。いかに正しいことも限界を超えて絶対化すると悪になります。また、逆に悪に見えることも限界内ではよい部分があります。正義感、それが強くなれば知らず知らずのうちに傲慢という罪を犯します。自分が正しいという気持ちは、必ず相手を裁こうとします。ひとを裁こうとする気持ちは、自分が相手の心の悲しみや寂しさをよく理解していないということでもあるわけです。

個人的な考えで申し訳ないのですが、私たち医療者は平穏な死や尊厳のある死、満足死を目指されるべき死として働いているとしたら、それは違っており、そのために私たちは医療や介護を行っている訳ではないと思います。私たちの仕事は死を見届けるのではなく、最後の最期まで生き抜く「生」を支えることで、私たちは死をみとるのではなく、最後の最期の場面で傍にいることを許されたものという自覚を持ち、呼吸がなくなり、心臓の鼓動がとまるまで「生」を支えるために仕事をするのが大切なのだと思います。ある施設では「私のところは看取りをします」。「看取りの数は〇〇例で、こんなに看取りをしています」というのは、何となくおかしく、それはその人たちの「おごり」のような気がしてなりません。

マザー・テレサは『人生の99%が不幸だとしても、最期の1%が幸せならば、その人の人生は幸せなものに変わる』と言っています。看取りはこの単に1%をプロデュースすることが仕事であると思います。死に直面するからこそ、私たち医療・介護関係者ではなく、家族主体で患者さん中心の看取りこそが、その人や家族は幸せなのではないでしょうか。